

回向の仏道

寺川俊昭

一

親鸞が開顕した浄土真宗、すなわち浄土真実教行証とその特質を顕揚した仏道は、本願の仏道というべき性格を基本的にもつ。このことは『教行信証』において、浄土真宗を形成する真実行乃至化身土の五つの契機について、一々にその根拠となる本願をあげて、真実行以下がそれぞれの本願の回向成就の法であることを明示していることから、一々に直ちにいうことのできる浄土真宗の基本的性格である。浄土真宗を形成するこれらの契機の中で、我々の体験という最も直接的かつ明確な形で実現するものは、浄土真実の行及び浄土真実の信であり、その体験が「選択本願の行信」と厳密に性格づけられるいわゆる本願の信であることは、『教行信証』の語るところに照らし、かつ我々の経験に照らして、疑問の余地のないところである。のみならずこの本願の行信を、衆生が自ら発起した宗教心ととらえないで、その根拠に如来の本願を見、さらにその本願が衆生に回向成就したものにほかならぬと自証したところに、親鸞の極めて独創的な行信の了解、ひいては本願の了解があるのであった。「信巻」はこのことを端的に、

しかれば、もしは行・もしは信、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまうところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざること。知るべし。

『真宗聖典』二二三頁

と語る。行信が如来清淨願心の回向成就そのものであるとは、形をこえた如来の願心が、清淨という質を保持したままで衆生の行信という形にまでなり、衆生の信仰的自覚という形となって表現しているということにはかならない。そうであるならば、行信とは生き生きと衆生を撰取して止まぬ願心の具体的形であり、行信において自証されるものは、如来・清淨という言葉で表わされる、法性真如というか、衆生にとっては超絶的である如来智慧海の自内証といふべき無上涅槃の世界であるという、端倪すべからざる親鸞の信仰理解がここに躍動していることになる。その点から、本願の仏道としての浄土真宗は、より積極的な意味で「回向の仏道」ということができるのである。

このような行信が自らに発起する端的を、親鸞は回心として、よく知られているように次に表白する。

しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛の西の暦、雜行を棄てて本願に帰す。

〔真宗聖典〕三九九頁

ここに表白される「帰本願」の内実を、我々は善導の深心釈にいわゆる「乗彼願力定得往生」に依り、さらに世親の『願生偈』にいわゆる「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」の不虚住持功德を語る教言に依って、積極的にとらえることができる。「帰本願」とは一応は、発遣する法然の教言に遇うて、招喚する本願に覚醒し、本願に帰入したという、一つの根源的覚醒を表白するものであろう。しかしながらこの二祖の教説に従って再応この表白の深意を尋ねる時、帰入した本願は、親鸞の存在の全体を根源から生かし、本願内存在として意味づけ、のみならず荷負する力用として自証されていることを、私は知ることができる。この自証に立つならば、本願はより積極的にかつより正確に、本願力と表白されてくることとなる。

「帰本願」という自覚を内実として、回心と共に発起する衆生の行信は、この意味で本願力と表明される本願のはたらきの賜物である。けれども我々は再びここで、行信はすべてこれ如来清淨願心の回向成就以外の何ものでもないとする、親鸞のあの独創的な行信理解を、さらに回向の了解を想起しなければならぬ。そうすると行信は本願のはたらきの賜物であると共に、より積極的に、衆生を荷負して往生の一道、すなわち浄土を開示された生に立たしめる

本願が、さらにいえば本願力に値遇した衆生に大宝海の譬えで表わされるような豊穡な無上涅槃の眞実功徳を現前せしめ、流転の中に空過する生その悲惨さを越えて向涅槃の一道に立たしめるその本願力が、衆生の上に形をとって表われ出したものであると、親鸞は力をこめて語り告げようとしていることに、我々は思い到るのである。このようにして親鸞は、形をこえた如来の本願もしくは願心が、衆生の行信という形をとって現行するその道理を、回向という言葉に託して語るのであった。そしてこのような了解が、『大経』の願成就の教説に基いて立てられていることも、もはや周知の通りである。

諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。唯だ五逆と誹謗正法とをば除く、と。〔眞宗聖典〕二二二頁)

聞名に凝集する聞法によって獲得される信仰的自覚、それは歡喜に満ちた一念の淨信である。しかもその淨信は、その全体が「至心」と表わされる如来の願心の回向そのものであると、親鸞は聞きとめた。回心と共に發起する一念歸命の淨信に、回向して止まぬ願心を自証したのである。そしてそれをおし進めて、一念の淨信はひとえにこれ如来清淨願心の回向成就にほかならぬと徹底して了解したのが、親鸞の独創であった。

この願成就の教説に呼応しかつ証言する形で、世尊の教言に帰して賜わる一念の淨信を、世親は『願生偈』の冒頭に、

世尊、我一心歸命尽十方無碍光如来、願生安樂國

と表白した。一念の淨信を表白するこの一句は、そこに歸命尽十方無碍光如来と、如来の名号を輝き出させている。

世尊の教言に帰して賜わった一心歸命の信は、親鸞がその独自の名号解釈でその深意を見事に顕開したように、より深い意味で本願招喚の勅命に帰した信仰的自覚である。のみならずその信を表白することは、直ちに無碍光如来の御名を称えることにほかならない。その意味でこの一心歸命の淨信は、本願の名号に帰した自覚というべきであり、称

名として表白される信仰的自覚である。親鸞がこの一心帰命の信を、行信と表明する所以である。

このように一心帰命の信の質というか深い意味を、親鸞に正確に自覚させていった願成就の教説の意味深い一句「至心回向」について、親鸞は『一念多念文意』に註釈して次のようにいう。

「至心回向」というのは、「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御ごころなり。「回向」は、本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう御のりなり。
〔真宗聖典〕五三五頁

願成就の文が「回向」というのは、本願の名号を十方の衆生に与えたまうということを語り告げる教言である、親鸞はこのように了解したに違いない。その了解に従うならば、回向とは、本願の名号が十方の衆生と本願に呼ばれている「われら」に与えられている、この事実をいう。このことは、一心帰命十方無碍光如来という本願の行信が、私に発起し現前しているという、その事実を指すにほかならない。そしてこの行信において自証されるもの、それこそ真実なる阿弥陀如来の御心、すなわち『大経』が至心と語り親鸞が真実心と了解した願心そのものである。帰命十方無碍光如来の行信に、如来の真実心なる願心が回向表現して止まぬ。だからこそこの行信は、浄土真実教行証と性格づけることのできる浄土真宗のすべてを支える礎石となるのであって、この行信の表白すなわち「称無碍光如来名」をもって、親鸞は大行と特質づけたのであった。

二

回向の事實は、一心帰命の信の現在前である。この回向の意味を、早く曇鸞は次のように明確にとらえていた。

おおよそ回向の名義を釈せば、いわく己が所集の一切の功德をもって、一切衆生に施与したまいて、共に仏道に向かえしめたまうなり、と。
〔信巻〕所引『浄土論註』・『真宗聖典』二三七頁

もちろんこれは親鸞の了解にしたがっての読み方であり、回向する主体を明らかに如来ととらえている。「以己所集

一切功德、施与一切衆生、共向仏道」としるした曇鸞の真意は、もとよりにわかたに断定することはできない。しかしもし曇鸞が親鸞のこの了解を聞くならば、おそらくは我が意を得たりと許すに相違ないであろう。一心帰命の信は、このような如来の回向を自らの内に自証するのである。それはいい換えれば、このような如来の回向を大地として我らの一心帰命の信はあるのだということである。

さらに尋ねよう。曇鸞がこのように了解した回向は、もと世親の『浄土論』に五念門の行の随一として語られるものであった。

いかんが回向する。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願す。回向を首として大悲心を成就することを得たまえるがゆえに。

〔真宗聖典〕一三九頁

そしてこの回向門を行ずることにおいて成就する功德として、『浄土論』はさらに園林遊戯地門を語る。しかもこれは出門の功德、すなわち衆生に対してはたらき出る如来の功德にほかならない。

出第五門というは、大慈悲をもって一切苦悩の衆生を觀察して、応化身を示して、生死の園・煩惱の林の中に回入して、神通に遊戯し教化地に至る。本願力の回向をもつてのゆえに。これを出第五門と名づく。

菩薩は、入四種の門をして自利の行成就す。知るべし。菩薩は、出第五門の回向利益他の行成就したまえり。知るべし。

〔真宗聖典〕一四四―四五頁

ここにいわれている菩薩、すなわち入四種の行を行じ、出の功德を行ずる主体である菩薩を、親鸞は願心の主体である法蔵菩薩と了解したことは、この『浄土論』の教説に依って製作された『入出二門偈』の読み方をみるならば、疑問の余地なく明らかである。

菩薩は五種の門を入出して、自利利他の行、成就したまえり。

不可思議兆載劫に、漸次に五種の門を成就したまえり。

(中略)

第五に出の功德を成就したまう。菩薩の出第五門というは、いかんが回向したまう、心に作願したまいき。苦惱の一切衆を捨てたまわざれば、回向を首として、大悲心を成就することを得たまえるがゆえに、功德を施したまう。

かの土に生じ已りて速疾に、奢摩他毘婆舍那

巧方便力成就を得已りて、生死園煩惱林に入りて、

応化身を示し神通に遊びて、教化地に至りて群生を利したまう。

すなわちこれを出第五門と名づく、園林遊戯地門に入るなり。

本願力の回向をもつてのゆえに、利他の行成就したまえり、知るべし。

『真宗聖典』四六一―四頁)

このように親鸞は、『浄土論』が語る回向門の行と園林遊戯地門の功德を包んで、菩薩の出門を語る。ここでは一応、因の回向門の行と果の園林遊戯地門の功德と、この二つが語られているけれども、この因果は相即して、回向という言葉で表わされる菩薩の願行を表わしていると、了解しなければならぬであろう。このような菩薩の願心である大悲心に立って、一切の苦惱する衆生を大悲の中に摂取しようとする「利益他」の行を、世親は回向という言葉をもって語ったのであった。そしてこの利益衆生の具体的な形は、「応化身を示す」すなわち煩惱ゆえに生死に流転して苦悩する衆生の只中において、真実教を語ってその衆生を教化し、共に仏道を求め仏道に立たしめることにほかならぬいと、世親はいう。このような具体的な内容をもつ、回向という行において、一切苦悩の衆生を捨てることのできな菩薩の大悲心は成就することを得たのであると、『浄土論』は回向の意味を顕開していたのである。

世親の顕開したこの回向の意味をさらに展開して、曇鸞はいう。

『浄土論』に曰わく、「云何が回向したまえる。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首

として大悲心を成就することを得たまえるがゆえに」とのたまえり。

回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。

往相は、己が功德をもって一切衆生に回施したまいて、作願して共にかの阿弥陀如来の安樂淨土に往生せしめたまうなり。

還相は、かの土に生じ已りて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしめたまうなり。

もしは往、もしは還、みな衆生を抜きて生死海を渡せんがために、とのたまえり。このゆえに「回向為首得成就大悲心故」と言えり、と。
〔信卷〕所引『淨土論詳』・『真宗聖典』二二三頁

回向についてこのような深義を、世親・曇鸞の二祖は顕開していた。一読して直ちに知られるように、世親は仏道を大乘として成立せしめる菩薩の願行を、五念門、五功德門として語るのであるが、その園林遊戯地の功德としてはたらく回向の行とは、曇鸞の回向を二相に展開した了解においては、実に回向の還相にはかならないのである。衆生に名号を施与し、名号において菩薩所修の功德である眞実功德を回施するという内実において表わされる回向の往相は、この還相回向に包まれ、この還相回向において展開するはたらきであるといふべきである。だからこそ曇鸞のこの回向の二相了解を踏まえて『淨土論』を読んだ親鸞は、『入出二門偈』にはっきりと語られているように、「回向為首得成就大悲心故」に「施功德」を添えて回向を了解し、この回向を成就する道として園林遊戯教化衆生があるのだと、顕開したのであった。世親・曇鸞の二祖にしたがひ、さらに親鸞にしたがって回向の深義を尋ねようとする時、我々はまずこのことに対して的確な了解をもつべきであろう。

これら祖師たちの了解に依りつつ、回向の意味するところについて、再応推求していききたい。重ねていうように、回向の事実とは『一念多念文意』において親鸞が端的に語ったように、衆生に対する名号の施与であり、我らにおけ

る一心帰命の信の現在前であった。この一心帰命の信を獲た時、衆生はその内面に、流転する虚妄の生を破り転じて、如来の清浄なる世界を開示する真実なるものはたらきを、強くそして鮮明に自覚するのである。そしてこのような形で立つことのできた仏道に、衆生の心を向かわしめ求めしめるべく喚びかけ促し続けて止まない、如来の大悲のほたらきかけがその全体を包んであったことを、深く深く自証するのである。このような事実が、曇鸞がその名義を解釈するという形で見事に顕開した、回向の意味であった。しかもこの衆生を、「一切苦悩の衆生」と見るいかにも確かな眼が、早く世親に開けていた。それはむしろ、仏道そのものの眼であるというべきかも知れない。衆生のこの痛まれて止まない現実があるからこそ、衆生を仏道を求める心に喚び覚まし、仏道に立つべく促して止まない如来のほたらきかけは、大悲心と自証されてくるのであろう。大悲心とは苦悩する衆生に、また苦悩する衆生にして初めて、その一心帰命の信の内面に感得され自証される、如来の願心である。そしてこの苦悩する衆生の、まさにその流転の中に苦悩する因である無明の闇を破って、衆生を尽十方の無碍光の中に攝取して止まない大悲心は、衆生に獲得される一心帰命の信すなわち名号の施与においてこそ、その確かな満足を得る。だからこそ『浄土論』は、「回向為首得成就大悲心故」と語ったのであろう。

しかしながらこの時、我々は改めて問わなければならない。如来の回向の事実であり、また如来の回向を深々と自覚自証する一心帰命の信は、一体いかにして我ら衆生に獲得されるのであるかと。すでに述べたこの行信発起の縁について再び言及するならば、それは「無量寿仏の威神功德不可思議なることを讚嘆」する真実教を語る、師の教言との値遇をその唯一無二の縁とする。このことが、法然の教言との値遇において「雑行を棄てて本願に帰す」ことのできた親鸞が、自らの体験を『大経』願成就の教説に照らして得た、確かな知見であった。のみならずこの師教との値遇において発起する一心帰命の信が、「至心回向」の教言によって、全体これ如来の清浄なる願心の回向成就そのものであると自覚される時、よく衆生の心を開いて仏道に向かわしめた師の言教は、まさしく「大悲心をもつて一切苦悩

の衆生を觀察して、応化身を示して、生死の園、煩惱の林の中に回入して、神通に遊戲し教化地に至る」と世親が明かした、菩薩法藏の園林遊戲地門のはたらきの具体的形そのものであると自覚されてくることとなるであろう。それはまた、回向を往・還二相に展開した曇鸞の頭開に依るならば、「かの土に生じ已りて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしめたまうなり」という菩薩の回向の還相の、具体的事実にはかならないというべきである。

一体、本願の仏道において、師とはいかなる存在であろうか。しばらく『高僧和讃』に、このことを聞こう。

大心海より化してこそ 善導和尚とおわしけれ

末代濁世のためにとて 十方諸仏に証をこう

世世に善導いでたまひ 法照少康としめしつ

功德藏をひらきてぞ 諸仏の本意とげたまう (善導讚)

源信和尚ののたまわく われこれ故仏とあらわれて

化縁すでにつきぬれば 本土にかえるとしめしけり

本師源信ねんごろに 一代仏教のそのなかに

念仏一門ひらきてぞ 濁世末代おしえける (源信讚)

智慧光のちからより 本師源空あらわれて

浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう

善導源信すすむとも 本師源空ひろめずは

片州濁世のともがらは いかでか真宗をさとらまし (源空讚)

疑問の余地なくこれらの和讃は、教言を説いて衆生を教化し、衆生の心を開いて仏道に向けしめるものとして、祖師

たちの教恩を讃仰している。すなわち我らのために世に出興した応化身を、そこに仰いでいるのである。この了解をまとめるかのように、「証巻」に親鸞はいう。

しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応化種々の身を示し現わしたまうなり。

『真宗聖典』二八〇頁

ここにいわれる報身すなわち本願酬報の如来とは、「真仏土巻」に真仏を顕開して、

『論』には「帰命尽十方無碍光如来」と曰えるなり。

『真宗聖典』三二三頁

と示しているように、名号そのものであるというべきであろう。願心の回向成就の一心が、明確に自証するところである。それに対して応化身とは、我らを教化して仏道に心を向けしめる師教に帰して、深々と自証する如来のはたらきである。阿弥陀なる如来は、これらの報身そして応化身として、具体的にそのはたらきを現前していると、親鸞は了解したのであった。そしてこの応化身のはたらきを回向という視点に立つてとらえる時、それはまさしく本願力のはたらく形としての、還相回向の具体的事実にはかならないことが知られるのである。

三

回向の意味を推求して、私はここまで来た。この時私は改めて、『教行信証』の中で親鸞が浄土真実教についてだけ、その根拠となる本願を挙げなかった理由について、一つの推察が可能になったことを思う。確かに真実教は「教巻」に、

往相の回向について、真実の教行信証あり。

と明記されているように、往相回向の始まる所であり、かつ往相回向を成立せしめる契機の第一である。けれどもすでに尋ねたように、具体的には「よき人の仰せ」として聞かれる浄土真実教とは、その深義においては、浄土の如実の功德すなわち無上涅槃の功德に相應する浄土の菩薩の方便力によって、一切苦悩の衆生に語りかけて止まぬ、

浄法界等流の言説であった。取りも直さず、還相回向の具体的形である。その教言が、よく衆生を開化して仏道に向かわしめ、浄土すなわち無量光明土という形として真実功德のはたらく世界を衆生に告知する浄土真実教として、直ちに往相回向の始点となる。この二重の意義という複雑さのために、親鸞は敢えてその根拠となる本願を挙げなかったのではなからうか。

すでに述べたように、浄土真宗は回向の仏道と了解されるべき特質をもつ。その回向の仏道の構造を、「教巻」はまず二種回向をもって立体的に示す。

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。

〔真宗聖典〕一五二頁

二種回向をもって浄土真宗を体系づける親鸞のこの了解が、回向に二種の相を開いた曇鸞のそれに依っていることは、いうまでもない。それについて、曇鸞はすでにみたように、「己が所集の一切の功德をもって、一切衆生に施与しまいて、共に仏道に向かえしめたまう」はたらきを内実とする回向に、往相・還相の二相を立てたのである。それに対して親鸞は、二種の回向ありというのであって、往相の回向と還相の回向と、二種の回向があると明言している。二種の回向という限り、共に如来の回向であるけれども、その性格に二種として区別される違いがあるとの含意があることを、我々に注意しなければならないのではあるまいか。

往相の回向は、真実の教行信証という四法を契機として成立する仏道である。それは如来の回向すなわち本願の名号の施与に立つところに実現する、往生浄土の相をもつ生であり、かつそれが生きられていく歩みである。私は『教行信証』の語るところにしたがって、むしろ願生浄土の仏道と、これを了解したい。そして真実の教行信証の四法を挙げていられるけれども、より凝集してとらえれば大行と大信、すなわち真実行と真実信の二つの契機が、往相回向の具体的形としてあることは、「行巻」の、

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。

〔真宗聖典〕一五七頁

という頭場によって、明白である。この大行と大信について、親鸞は大行にはっきりと「称無碍光如来名」という内容づけを行って、それがいかなる事柄であるかを示している。けれども大信については、そのような定義を示さないので、ただ大信の性格と特質を、力をこめて頭開するのである。だから我々は、大信とは大行として発露する信仰的自覚であり、称無碍光如来名として衆生に具体的に現行する本願の名号に帰した自覚であると、了解すべきであろう。真実行・真実信は、一行信の二つの契機である。だからもし行という視点に立って行信を見る時、それは全体が真実行であり、信という視点に立つ時、行信は全体これ真実信と呼ばれるものである。この行信の成立こそ回向の事実であることは、この論の最初に述べた。それは本願力の回向であるから、行信は衆生の生の全体に関わる信仰的自覚である。だから行とは具体的には称無碍光如来名という行為であり、信とは称無碍光如来名と発露する自覚であるけれども、これを単なる口業としての行為、単なる内面の自覚と理解しては誤りであろう。そうではなくて、称名とは称無碍光如来名者、信心とは信心の行者という、行信において転成した生そのものを表わしているのである。如来の回向であるこの行信を立脚地として実現する生と、この生を力を尽くして生きようとする生の道程、いい換えれば名号に帰することにおいて転成した生の力動的全体を、往相回向は表わすのである。

本願の名号の施与こそ、往相回向と親鸞が語り表わした願生の仏道の核心である。この本願の名号に帰した自覚の発露、視点を变えていえば本願の名号が衆生の上に具体的に現行しはたらく形は一心帰命の信であり、その表白である称無碍光如来名であるが、この行為のもつ深い意味を「極速円満す、真如一実の功德宝海なり」と己証したところに親鸞の独創があり、親鸞の仏道了解の全体を支える立脚地があった。もちろん称名をもって大行とする親鸞のこの称名の意味把握が、『願生偈』に世親が、

観仏本願力 遇無空過者

能令速満足 功德大宝海

と語り表わした不虛作住持功德の教説に依ってなされたことは、改めていうまでもなくすでに周知のことである。そうであるから親鸞が本願の名号の施与とらえた回向の内実は、大宝海の譬えて表わされる如来の功德、よりの確にいえば、如来智慧海の自内証である無上涅槃の功德、端的にいえば眞実功德の回施そのものであると自覚されるであろう。果して親鸞はいう、眞実功德は名号であると。

眞実功德ともうすは、名号なり。一実眞如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。一実眞如ともうすは、無上大涅槃なり。
〔一念多念文意〕・〔眞宗聖典〕五四三頁

回向の事実である本願の行信においてはたらき出るもの、それは眞如一実のはたらきである眞実功德である。この功德に遇うて、衆生はその流転する虚妄の生をひるがえして、如来の眞実功德に依止する生を転得するのである。

『論註』にいわゆる「本願無生の生」であるが、この生は眞実功德に依止するからこそ、眞如一実すなわち無上涅槃に開かれた生であり、無上涅槃に自然に向かう生である。このような眞実功德に依止する生を、親鸞は正定聚と語り表わしたのである。そしてこの正定聚の機に生きられる生を、親鸞は「必可超証大涅槃」、すなわち「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」生と表明した。注意すべきはこのような大般涅槃道こそが、親鸞が『浄土三經往生文類』の思索において、眞実報土の往生と顕揚した難思議往生の内実にはかならない、ということである。さらに付言するならば、法然が念仏往生と端的に示した仏道の内実をさらに根源化して、親鸞は次のように顕開していることを想起したのである。

ひとすじに、具縛の凡愚・屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。
〔唯信鈔文意〕・〔眞宗聖典〕五五二頁

見事に顕揚されているように、無碍光仏の不可思議の本願、不可思議の名号の信樂によって、凡夫は煩惱の身のまま

に大般涅槃道に立つのであって、これが親鸞が根源化しかつ凝集してとらえた念仏往生の仏道である。それを親鸞は難思議往生と呼ぶのであるから、我々は曖昧さをとどめないではつきりというべきであろう。『唯信信文意』において親鸞が、回心のところに開かれる生として顕開したこのような大般涅槃道こそ、往相回向の具体相であると。

往相回向をめぐる動く私の想念は、早く名号不思議の信樂によって、不断煩惱得涅槃の大道に立つとの親鸞の無上仏道の顕揚に尋ね至って、心躍るものがあつた。〔浄土真宗の法印〕『大谷大学研究年報』所収〕この如来の往相回向の恩徳として、「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」に賜わる難思議往生があるのであるが、この往相回向の心行を獲ることによって、現生に正定聚に住する身となつた人に開かれそして生きられる、「必至滅度」する生の内実を語る「証卷」こそ、往相回向の仏道の積極的内容を顕開するものとして、いたく私の心をとらえる。それを尋ねるに先立って、しかしながら親鸞がこの無上仏道を誓願一仏乗と朗々と顕揚する、その確信の依つて立つところに、私はしばらく思いをひそめたい。いうまでもなくそこには、如来の回向に帰した体験として回心があり、懺悔があるのである。

四

回心というは、自力の心をひるがえし、すつるをいうなり。

〔真宗聖典〕五五二頁

『唯信鈔文意』に、親鸞は回心を定義してこのようにいう。自力の心とは我執に立つて自己をたのむ心であり、流転の因として仏教の知見が凡夫の最も重い問題性としてえぐり出してきたものである。いま『成唯識論』によって、主体を自我と固執するその我の執着を、末那識に相応する四煩惱のはたらきとして明かすその所論を聞こう。

その四とは何ぞ。謂く我癡・我見並びに我慢・我愛にして、これを四種と名づく。我癡とは謂く無明ぞ。我の相に愚かにして無我の理に迷うが故に、我慢と名づく。我見とは謂く我執ぞ。我に非ざる法において妄計して我と

なすが故に、我見と名づく。我慢とは謂く踞傲ぞ。所執の我を恃みて心をして高挙ならしむるが故に、我慢と名づく。我愛とは謂く我貪ぞ。所執の我において深く耽着を生ずるが故に、我愛と名づく。(中略)この四は常に起りて内心を擾濁し、外の転識をして恒に雑染ならしめ、有情これに由りて生死に淪廻して、出離すること能わざるが故に、煩惱という。

『新編成唯識論』一〇七頁

この解明によって、自力の心の根本にあるものが無明であることを改めて思い知る時、私は直ちに親鸞が無碍光の恩徳を破無明闇と顕揚する、あの「総序」冒頭の表白を想起する。それは無碍光を自証する一心帰命の信こそが、凡夫の流転する生を転じて一無碍道に立たしめることを表白しているのであるけれども、いかにも体験的に語られるこの事実をより自覚的にいうならば、本願の名号の施与において、衆生はその流転の因である無明―我執を摧破して一無碍道に立つものとなるのであるけれども、よくその転成を実現するものこそ名号において回施せられる真実功德である、こういうことができるのであろう。『唯信鈔文意』の言葉にしたがっていうならば、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂する誓願不思議への帰入の端的に、自力の心をひるがえしする回心が現前するのである。回向の内実を前述のように、名号への帰入における真実功德の回施と了解するならば、この回心こそが、如来の回向に帰入した体験であるといわなければならないであろう。そしてこの回心はそれ故に、自力の心すなわち無明を根本とする我執に依止して、だからこそ流転し続けてきた虚妄の生の、まさにその自己の全体を包む虚妄性ひいては虚偽性を深く深く覚知し、これを懺悔する心である。この回心―懺悔に立って、それに覚醒しそれに帰入した衆生に回心を惹起せしめるような、回向して止まない如来の願心を推求する思索を、親鸞は「信巻」に展開したのであった。いわゆる三心一心の問答であるが、この推求こそが親鸞独自のあの回向の了解が成立する根拠を解明した思索であることが、思われてならない。

聞名によって獲得される一心帰命の信を、その全体が「至心回向」であると語る『大経』の教言を解釈した『一念

多念文意』の了解を、もう一度想起したい。至心とは如来の真実なる願心をいうのであり、回向とは本願の名号の施与である、親鸞はとらえていた。回心と共に本願の名号に帰入した身に鮮明に自証されるもの、それは流転の中に埋没する虚妄の身に真実功徳を回施して止まぬ切々たる願心である。親鸞は事態をこのようにとらえていたに違いない。この了解と呼応して、至心釈に親鸞はいう、「この至心はすなわちこれ、至徳の尊号をその体とせるなり」と。本願の名号の施与すなわち一心帰命の信の現在前という回向の事実には立ち、真実功徳の回施の事実としてある回心に立って、そこに自証される如来の真実心を、『大無量寿経』の教説に依りながら渾身の力をふるって推求する思索である至心釈に接して、私は回向の原点がいかにも鮮明に探り当てられていることを強く感じ、感銘を禁じ得ない。煩を厭わず、その全文を引こう。

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもって如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念一刹那も清浄なることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心をもって、円融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心をもって、諸有の一切煩惱悪業邪智の群生海に回施したまえり。すなわちこれ利他の真心を彰わす。故に疑蓋難ることなし。この至心はすなわちこれ、至徳の尊号をその体とせるなり。(中略)この心すなわちこれ、不可思議不可称不可説一乘大智願海、回向利益他の真実心なり。これを至心と名づく。

〔真宗聖典〕二二五―七頁

至心すなわち如来の真実心を推求するこの思索をたどる時、私は『數異抄』が伝えている「聖人のつねのおおせ」が想起されてならない。確かに親鸞は「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」と述懐していた。彼此あい照らしてみても、清浄心なく真実心ないままに、穢悪汚染・虚仮諂偽の身として生きる衆生、取り

も直さず「そくばくの業をもちける身」として生きていくものを大悲して、如来は本願をおこしたのだと親鸞は感佩している。それは如来がこのようなものとして衆生を見出し、本願をおこしたのだということではなく、苦悩する衆生の祈りが、名号に帰して破無明闇の恩徳をこうむる中で、如来の作願すなわち「たすけんとおぼしめしたちける本願」を感得し、それを一切の苦悩する衆生を悲憫する大悲心と自証しているのだというべきであろう。同じように、本願の名号に帰して度難度海の一道すなわち無碍の一道に立つことができた者が、無始已来というほかはない長い流転の中にある虚妄の生を転じて、よく一無碍道に立たしめた円融無碍の真如一実の功徳を回施して止まぬ如来の真心をそこに感じ、そして我らのためにこの功徳を成就した如来の兆載永劫の修行を、大きな恩徳感の中で深く深く自覚しているのである。親鸞のこの驚くべき願心の推求によって、『大無量寿経』が一種の文学の形式で語る法蔵菩薩物語りは完全にその神話性を破り、本願の名号に帰するところに成立する信仰的実存の因位を明かすものという、深い自覚的意味が明確に顕開されていったのである。

繰り返しこの至心積の文章をたどる時、私の眼は「一切群生海、自從無始已来乃至今日至今時、穢惡汚染無清淨心、虚仮諂偽無真実心」という言葉に、強く引きつけられる。親鸞のこの回心に開かれた深く鋭い自己凝視に、我々は十分の注意を払わなければならない。それは信衆積の言葉に依れば、「法爾として真実の信衆なし。ここをもって無上功徳値遇し難巨く、最勝の淨信獲得し難巨し。」とえぐり出された衆生の現存在である。このような衆生が、真実信心を獲て真実功徳の回施にあずかり、仏道に立つことが一体できるであろうか。不可能であり、あり得ないというほかはあるまい。にもかかわらず今現に名号に帰入して真実功徳の回施にあずかり、向涅槃の清閑なる一道に立っている。不可思議と讃嘆するほかはないこの驚くべき事実が衆生に実現する、そのことの全体を支えているのが、「大莊嚴をもって衆行を具足して、諸の衆生をして功徳成就せしむ」と『大経』が説く菩薩法蔵の願行であり、『願生偈』に依って親鸞が得た了解によれば、法蔵菩薩の五念門の行であり五功德門のはたらきである。さらに名号に帰入した

者を証大涅槃の一道に立たしめる恩徳を往相回向と了解するならば、清浄心なく真実心なき衆生のその無明煩惱の中に回入して衆生の心を開化し、仏道を求め仏道に向かう心を養育するより深い恩徳として、如来の還相回向のあることを思わなければならない。「もしは往、もしは還、みな衆生を抜き生死海を渡せんがために」と曇鸞はいうていた。如来の還相回向がなかったならば、「衆生を抜き生死海を渡す」往相回向は成立し得まい。すなわち往相回向を包んで還相回向があるのであって、往相回向が衆生に願生浄土の仏道として成就するその根拠となり、かつ大地として支えているものが還相回向であると、了解しなければならぬのである。衆生に真実功徳を回施し仏道に立たしめる菩薩の真実心は、このようにして菩薩の行である本願力の回向、より具体的には往還二種回向によって、衆生に回向成就するのである。

五

かつて先師曾我量深は、唯識教学が阿頼耶識に自相・因相・果相の三相を立てる教説に示唆を受けて、願心に三相を立てた。至心なる願心は果相であり、信樂は自相、そして欲生は願心の因相であると了解したのである。先師のこの了解の深意を、これまで進めてきた二種回向の考察に立つ時、いかにも示唆に富んだものと私は感ずる。果たして親鸞は、この至心を菩薩の第五門すなわち園林遊戯地門を特質づける「回向利益他」をもって彰わし、「回向利益他の真実心」と顕揚している。いかにも厚味のあるこの立体的な願心の了解を、我々は思いを凝らして正確に尋ねなければならぬ。確かに親鸞がいうように、往相回向は大行・大信を契機として衆生に成就する。その大行・大信が衆生に回向成就する、すなわち往相回向が衆生に成就する根源のところに、如来の還相回向のはたらきがあるといふべきではなからうか。我々はしばしば、往相回向の彼方に還相回向を期待する。往相回向を全うじて、浄土において還相利益他の力用を得て、穢国に還来すると理解している。いわば回向は如来のはたらきを表わし、往還二相は衆生

にあると理解している。だが親鸞の了解は、果たしてそうであつたらうか。如来清浄の願心の回向成就として、衆生の願生浄土の仏道があるのであるが、それが成就するところには如来の二種回向の恩徳があると、親鸞は感佩していたに違いないと私は了解する。

さて繰り返して言うように、回向の事実の本願の名号の施与であつた。この本願の名号の深義を、親鸞は周知のようにな願招喚の勅命と了解していた。ところがこの招喚の勅命とは、願心の因相である如来の欲生の願心として、親鸞が推求し当てたものにほかならない。そしてこの欲生の願心を、親鸞は回向心として了解していくのである、『大經』が如来の願心として説く至心・信楽・欲生の三心について、親鸞は至徳の尊号を体として至心あり、至心を体として信楽あり、そして信楽を体として欲生ありと推求し、欲生こそ最も根源的な願心であるところとらえている。この如来の欲生の願心こそが、「如来、諸有の群生を招喚したまふの勅命」として、衆生を願生浄土の仏道に立たしめて、この願生の仏道を行ぜしめようとする願心であろう。しかもこの根源的願心である欲生心の回向成就である願生心こそが、衆生をまさしく願生浄土の一道に立たしめるものであり、一心帰命の信として獲得される本願の信の能動性というべきものである。もし真仏弟子釈のいかにも積極的な確信に依るならば、この願生心は必可超証大涅槃の一無碍道に立つ「金剛心の行人」を生む、能動的信そのものであろう。

この願生心によって、本願の仏道は願生浄土の仏道として具体的に実現する。この願生浄土の仏道はまた、往相回向の一道ととらえることもできるのであるが、この願生心として回向成就する因位の願心を、前述のように親鸞は如来の回向心と了解した。本願の名号に帰した自覚である一心帰命の信に、無始以来「無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛」されて虚妄の生を生きる我らを、清浄・真実の功徳界である浄土に招喚すべく回向表現して止まない願心を、親鸞は強く感得し自証したに違いない。ところが注意すべきことは、この如来の欲生心を回向心として推求しその意義を顕開する思索の中で、親鸞はその教証として曇鸞の回向を二種の相において顕揚する文を引き、さ

らに『浄土論』の出第五門を説く教言を引いていることである。衆生を往相回向の一道に立たしめるものは、反復言及してきたように願生心である。その願生心として回向成就する願心を回向心ととらえ、その回向する願心を回向の二種の相、すなわち往相の回向のみならず還相の回向をもって明らかにしていることは、よくよく注意しなければならない親鸞の見解である。至心釈において親鸞が、如来の眞実心なる願心を「回向利益他の眞実心」ととらえたと同じ了解がそこに動いているのであって、虚妄の中に流転し続ける衆生のその虚妄の只中、すなわち「生死の園煩惱の林の中」に回入し、神通に遊戯して衆生を教化して止まない、そこに本願力の回向の最も恩徳深厚なるはたらきをみたのではなかるうか。要するに、還相という形をとってはたらく本願力である。この還相回向のはたらきをまち、このはたらきにより、それと一つになって、衆生を浄土に招喚して止まない回向心は、願生心として回向成就するのである。要するに、本願の名号に帰した自覚である一心帰命し、だからこそ一心願生する本願の信は、如来の二種回向の賜物である。

『浄土三経往生文類』に、親鸞は次のようにいう。

如来の二種の回向によりて、眞実の信樂をうる人は、かならず正定聚のくらいに住するがゆえに、他力とまうすなり。

『正像末和讃』に、二種回向の了解を聞こう。

往相還相の回向に　　もうあわぬ身となりせば

流転輪廻もきわもなし　　苦海の沈淪いかがせん

無始流転の苦をすてて　　無上涅槃を期すること

如来二種の回向の　　恩徳まことに謝しがたし

南無阿弥陀仏の回向の

恩徳廣大不思議にて

往相回向の利益には

還相回向に回入せり

往相回向の大慈より

還相回向の大悲をう

如来の回向なかりせば

浄土の菩提はいかがせん

この前二首の和讃は同じ内容であり、『三経往生文類』に語られているのと同じ趣意であることは、一読してすぐに知られる通りである。要するに親鸞は、往相還相二種の回向に値遇することにより、そしてこの如来の二種回向の恩徳によって、衆生は真実の信樂を得て無上大涅槃にいたる道に立つのであると、力をこめて歌い上げているのである。それに対して後二首の和讃の意は、やや複雑であるように思われる。私はそれを尋ねて、ほぼ次のように了解する。それは回向の法である本願の名号に帰入する時、そこに如来広大の恩徳と讃嘆するほかはない真実功德の回施にあずかるのであり、そのことによって願生浄土の一道に我らは立つこととなるのであるけれども、この往相回向の心行はその時、無始已来無明的存在として如来に背いて流転し続けてきた我らの、その煩惱の中にあつて我らの心を開化して止まず、遂に我らをこの往相の一道に立つことのできる身にまで養育したより深い大悲のはたらきである如来の還相回向を、大きな懺悔の中で深く自証するのである。我らを往相回向の一道に立たしめる如来の大悲心を知ったものは、そのような身にまで我らを教化し養育した如来の還相回向の大悲心を、必ずやそこに自覚していくのである。考えてもみよう。如来のいのちもいうべき真実功德を回施して、無量光明土に願生せしめる往相回向と、この真如一実の功德界から衆生の無明海に応化し捨身して、衆生を教化して仏道に向かわしめる還相回向と、この如来二種の回向によって獲得された信心〓金剛心であるからこそ、この真実信心は浄土の大菩提心として、為衆願生の功利的願生心を突破し、念仏の一道を自信教人信する常行大悲の志願において、苦悩する衆生という穢土の現実に「共に」と深く踏み入る歩みとなって生きられていくのである。しかもこのような歩みを、親鸞は真実報土の往生ととらえ、これをもって願生道の内実と了解したのであって、この了解のもつ創造的意義を、私は正確にとらえていきたいと思う。

親鸞はおそらくはこのように、如来の二種回向を基本的に了解していたのではあるまいか。このことはさらに『高僧和讃』の、

弥陀の回向成就して

往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ

によっても、ほぼ誤りないものとしていうことができると思う。回心を踏まえて回向の意味を尋ねてきて、私はほぼこのような二種回向の了解に到達するのである。

六

我らの分限は、如来の二種回向に帰して、願生浄土の一道に立つところにある。このことについて親鸞は「証巻」に、断然次のように語る。

しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の教に入るなり。正定聚に往するがゆえに、必ず滅度に至る。
〔真宗聖典〕二八〇頁〕

我らを往相回向の一道に立たしめるものは、往相回向の心行である。往相回向の心行とはもちろん本願の信であるけれども、衆生に獲得される本願の信を顕揚する『大経』願成就の文を、本願信心の願成就の文と本願の欲生心成就の文との二つに分けてとらえた親鸞の了解に鑑みて、これを一心帰命の信であるからこそ一心願生の信として相統展開する、能動的な信仰的自覚ととらえたい。要するに願生心こそが、往相回向の心行の能動態である。この願生心の積極性を、親鸞は善導の語るころにしたがって、金剛心ととらえた。

また回向発願して生まるる者は、必ず決定して真実心の中に回向したまえる願を須いて、得生の想をなせ。この心深く信ぜること金剛のごとくなるによって、一切の異見・異学・別解・別行の人らのために動乱破壊せられず。

親鸞はこの金剛心という言葉によほど深い感銘を覚えたのであろうか。この言葉を反復引用しまた援用して、信心の積極性を語り続けるのである。

○能生清淨願心というは、金剛の真心を獲得するなり。本願力回向の大信心海なるがゆえに、破壊すべからず。これを金剛の如しと喩えるなり。
〔真宗聖典』二三五頁〕

○共に金剛の志を発して、横に四流を超断せよ。

○正しく金剛心を受けて一念に相応して後、果涅槃を得ん者。

○金剛の志を発すに非ざるよりは、永く生死の元を絶たんや。

○金剛というは、すなわちこれ無漏の体なり。

○まことに知りぬ、至心・信樂・欲生、その言は異なりと雖も、その意これ一なり。何を以ての故に、三心すでに

疑蓋雑ることなし。故に真実の一心なり、これを金剛の真心と名づく。金剛の真心これを真実の信心と名づく。

真実の信心は必ず名号を具す、名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり。この故に論主建めに我一心とのたまえり。
〔真宗聖典』二三五―六頁〕

○横超はこれすなわち願力回向の信樂、これを願作仏心という。願作仏心すなわちこれ、横の大菩提心なり。これを横超の金剛心と名づくるなり。
〔真宗聖典』二三七頁〕

○しかれば、願成就の一念は、(中略)すなわちこれ真実一心なり。真実一心すなわちこれ大慶喜心なり。大慶喜心すなわちこれ真実信心なり。真実信心すなわちこれ金剛心なり。金剛心すなわちこれ願作仏心なり。願作仏心すなわちこれ度衆生心なり。度衆生すなわちこれ衆生を摂取して安樂淨土に生ぜしむる心なり。この心すなわちこれ大菩提心なり。この心すなわちこれ大慈悲心なり。この心すなわちこれ無量光明慧に由って生ずるがゆえに。

願海平等なるがゆえに発心等し、発心等しきがゆえに道等し、道等しきがゆえに大慈悲等し、大慈悲はこれ仏道

の正因なるがゆえに。

『真宗聖典』二四一—二頁

○真仏弟子というは、真の言は偽に對し仮に對するなり。弟子とは、釈迦・諸仏の弟子なり。金剛心の行人なり。この修行によつて必ず大涅槃を超証すべきが故に、真仏弟子という。

『真宗聖典』二四五頁

○まことに知りぬ、弥勒大士、等覚金剛心を窮むるが故に、龍華三会の暁、まさに無上覺位を極むべし。念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。故に便同というなり。しかのみならず金剛心を獲る者は、すなわち韋提と等しくすなわち喜・悟・信の忍を獲得すべし。これすなわち往相回向の真心徹到するが故に、不可思議の本誓によるが故なり。

『真宗聖典』二五〇頁

堅固にして澄淨な金剛を喩えとして、眞實信心が金剛心と表わされるのであるけれども、そのような意味で眞實信心が美しくも金剛心といい表わされる根拠は、それが如来の無漏清淨なる願心の回向成就であるという点にあった。さらに如来の不虛作住持功德によつて、大宝海の喩えをもつて表わされる、無上大涅槃の清淨にして眞實なる功德の回施にあつた自覺であるからこそ、という点にあった。この点からいみじくもこの信心が眞實信心と呼ばれるのであつて、眞實信心において回施せられる眞實功德が、よく流轉する虚妄の生を轉じて眞實功德に依止する生、すなわち正定聚の機を誕生せしめ、無上大涅槃にいたる生に立たしめるのであつた。眞仏弟子積はこれを、「由斯修行、必可超証大涅槃」と語り告げているのである。

この金剛心を、親鸞が「横の大菩提心」ととらえていることが、いたく私の心を惹く。確かに親鸞は金剛心の内容を、願作仏心・度衆生心という大乘の菩提心として把握していた。これを敷衍する『高僧和讃』の語るところを聞く。

天親論主は一心に

無碍光に帰命す

本願力に乗ずれば

報土にいたるとのべたまう

尽十方の無碍光仏

一心に帰命するをこそ

天親論主のみことには

願作仏心のべたまえ

願作仏の心はこれ

度衆生のころなり

度衆生の心はこれ

利他真実の信心なり

信心すなわち一心なり

一心すなわち金剛心

金剛心は菩提心

この心すなわち他力なり

〔真宗聖典〕四九二頁

この天親讚によるならば、願作仏心とは一心帰命の信の意味にはかならない。ところがこの信はすでに尋ねたように、衆生を正定聚の機として成就し、大般涅槃道に立たしめるはたらきをもつ。この正定聚を親鸞は「仏にかならずなるべきみとさだまる」ととらえるのであるから、願作仏心とは「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」一道に立つことができた確信をいうのであって、決して単なる希望をいうのではない筈である。

この願作仏心は、すなわちこれ度衆生心と親鸞はいう。この転釈は私に直ちに天親論主の『願生偈』冒頭の、あの表白を想起させる。すなわち「世尊、我一心帰命尽十方無碍光如来、願生安楽国」との表白である。この表白の通り、一心帰命の信は一心帰命にとどまらずして、一心願生の信として相続し展開する。この能動的信の根柢を、親鸞は如来の至心・信楽・欲生の願心の回向成就の信であるからと、見事に開顕したのであった。その「願生安楽国」の信を、天親はさらに進んで「普共諸衆生 往生安楽国」と内容づけた。このような願生心が、「衆生を摂取して安楽浄土に生ぜしむる」度衆生心の具体相であるというべきではないであろうか。

願生心とは、厭離穢土・欣求浄土という、単に浄土を欣慕する主観的な宗教心ではない。「普共諸衆生 往生安楽国」の容易ならぬ仏道の志願を回向されて、これに感奮興起し、これに相応し、かつこれを行証しようとする能動的な意欲である。この志願をまっぴら一心帰命の信は、一心願生の度衆生心として相続し、ここに横超の大菩提心という

に価する内実を得るのである。この横超の大菩提心を内実として、正定聚の機に生きられる必可超証大涅槃の一無碍道は、誓願一仏乗と顕揚される堂々たる仏道として輝くのである。私は願生心にこのような重大な意義をみる。だからこそこの心が度衆生心、すなわち「衆生を撰取して安樂淨土に生ぜしむる」心として語られている点に、なお思いをひそめなければならぬ。

「普共諸衆生 往生安樂國」と表明される願生の志願において「共に」といわれるその衆生について、早く曇鸞は「一切外道凡夫人」、「下品凡夫」ととらえていたが、それは『願生偈』において、還相の菩薩がまさにはたらかかけようとする、「仏法功德宝」なき世界の衆生にほかなるまい。親鸞の透徹した了解にあっては、大悲の願心の機を「教巻」に「凡小・群萌」と、「信巻」に「穢惡汚染にして清淨の心なく、虚仮諂偽にして眞實の心なき」衆生と表白し、さらに「煩惱海に流転し、生死海に漂没」する「一切苦惱の群生海」と擬視し続けた、そのような衆生である。絶対に我々が見落してはならないことは、このような衆生の中に親鸞は自己を見ていたということである。親鸞は決して自分の外に、このような衆生を見ていたのではない。とするならば、願生心の核心はこの凡小とし群萌として生きる「一切外道凡夫人」を「我ら」と覚悟しつつ、この覚悟に立って「普共諸衆生 往生安樂國」と回向して止まぬ菩薩の大悲心を行証しようとするところにあるといふべきであろう。このような願生心として展開していく一心帰命の信を、親鸞は金剛心と呼び、願作仏心・度衆生心の故に「横の大菩提心」であると顕揚していったのである。そしてこの金剛心を「証巻」には「往相回向の心行」と呼んで、この自覚を獲た人を正定聚に住して大般涅槃道を生きるものと語っていくのである。

親鸞の願生心の顕開はさらに進む。「教巻」に本願の機を「凡小」と擬視した親鸞は、「正信偈」には祖師たちの表白によってさらに具体化し、「惑染凡夫・一生造惡・逆惡・極重惡人」と浮彫りにした。その群萌を、慈悲に、宗曉にさらに元照によって、「瓦礫・鉄・具縛凡愚・屠沽下類」と、さらに凝集的にとらえていった。のみならずさらに

進んでこの群萌の歴史的现实を、親鸞がその壮年期に生活を共にし、そして生涯共にあろうと願い続けた「いなかのひとびと」の具体的な姿である、

うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとりに、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田島をつくりてすぐるひとも……。

に、親鸞はしっかりと凝視していたのである。私はこのような具体相をもって生きる凡夫 \parallel 異生としてとらえられた人間を、「絶望的な不安の中にあるもの」、「孤立無援の孤独の中に生きるもの」と了解するのであるけれども、願生心とはこのような衆生を「我ら」と自覚しつつ、「共」に安楽国に往生せんと願い続ける志願である。穢土を厭離する心ではなく、この衆生の重く厳しい現実を置いて、そこに「共に往生する」道を行証しようとする心である。本多弘之のいわゆる「光りから闇へ」向かう心である。何故であろうか。この願生心が、二種の回向としてはたらく如来の欲生心 \parallel 回向心の成就の能動的自覚であるからである。自在神力をもって衆生の「生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道へ向かえしめたまう」如来の還相回向と、仏道を求める衆生に「己が功德をもって一切衆生に回施したまいて、作願して共にかの阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまう」如来の往相回向と、この二種の回向としてはたらく如来の回向心 \parallel 欲生の願心の回向成就として、衆生の一心願生する願生心があるからである。このような願生心 \parallel 金剛心が横超の大菩提心として、よく一乗の仏道に立つ仏者を誕生せしめるのである。

往相回向の一道に立つこの願生心 \parallel 金剛心を生きる者を、親鸞は「金剛心の行人」と表わして、善導にしたがってこれを真仏弟子と呼んだ。そしてこの真仏弟子の立脚地である金剛心すなわち浄土の菩提心を、道綽にしたがって次のように力をこめて顕揚するのであった。

『大経』に云わく、「おおよそ浄土に往生せんと欲わば、発菩提心を須いるを要とするを源とす。」云何ぞ。菩提はすなわちこれ無上仏道の名なり。もし発心作仏せんと欲わば、この心広大にして法界に周遍せん。この心長遠

にして未来際を尽くす。この心普く備に二乗の障りを離る。もしよく一たび発心すれば、無始生死の有輪を傾く、と。
〔真宗聖典〕二四七頁

のみならず親鸞は、この金剛心の行人が生きる生の内実を顕開するかのよう、金剛心が現生にもたらす十種の益を挙げる。総じていえばそれは第十の入正定聚の益であろうが、現生に大乘正定聚の数に入った人の生の積極性こそ、第九に挙げられる常行大悲の益にはかならない。遙かに龍樹の「深行大悲」に呼応するこの常行大悲について、親鸞は重ねて『安樂集』に依って次のようにいう。

いかんが名づけて大悲とする。もし専ら念仏相続して断えざれば、その命終に随いて定んで安樂に生ぜん。もしよく展転してあい勧めて念仏を行ぜしむる者は、これらをことごとく、大悲を行ずる人と名づく、と。

〔真宗聖典〕二四七頁

常行大悲とは、疑問の余地なく明らかに、自身における念仏の相続であり、他に対する念仏の勧めである。一言でいえば、本願念仏の自信教人信である。しかも改めて思えば、この念仏の自信教人信とは、

同一に念仏して別の道なきがゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。眷属無量なり。いづくんぞ思議すべきや。
〔真宗聖典〕二八二頁

といわれる浄土の眷属功德を、まさにその念仏の一道に立って行証しようとする行為ではないであろうか。

「証巻」は往相回向の心行を獲ることによって大乘正定聚の数に入り、必至滅度の生すなわち大般涅槃道に立った生の力動的な内実を語るかのように、『浄土論』に顕開された妙声功德・主功德・眷属功德・大義門功德そして清淨功德の五つの功德を挙げている。ほぼ同じ内容をもって、親鸞は『浄土三経往生文類』において難思議往生すなわち真実報土の往生を語っている。この五種功德の中で眼目となるものは、眷属功德であるに違いなく、往相回向の具体相である願生道とは、念仏を相続しました念仏を勧めて止まぬ常行大悲において、この浄土の眷属功德を行証しようとの

志願に立って生きられる生の能動性そのものである。そしてこの願生道を、親鸞が本願の機として凝視し続けた群萌の、重く厳しい現実の中で生き続けようと志願し続け、この願生の一道に自分の生を捧げて退転しなかった人として、私は往相回向の行人・親鸞を仰ぐのである。